

人と業績

## 常盤大定先生

——中国佛敎史研究の大成者——

横 超 慧 日

昭和六年の二月下旬の或る日、東京大学の赤門前で、大学から出てきて電車道を横断しようとした文学部の一人の老教授が自動車にはねられるという事件があった。今から三十七年も前のことで今日のように自動車街頭をわがもの顔に疾駆している時代ではないのに、そうした奇禍に逢うというのはよほど運が悪かったといえる。その教授は右足の脛骨を折ってただちに大学病院の整形外科にかつぎこまれた。あたかもその三月には定年退職ということ二十余年間立ってきた大学の教壇から去ることになっていたのに、この思いがけない事故のため、教授は五月中旬まで病院で過ごし、引退の日をベッドの上で迎えねばならなかった。その老教授というのが、他でもない自分の健脚にまかせて中国大陸に史蹟を求めていくたびも馳け廻った常盤大定博士であったとは。実になんとも皮肉な出来事であったと言わねばならぬ。当時大学院の学生であった筆者は、先生の好物をよく心得ていて大福餅を買って時々病床を見舞ったが、病床に在るとはいえ骨折にすぎないから意気甚だ壯んでいつも当るべからざる気焰を聞かされた。その頃の

心境は次にあげる臥病述懐の詩にほうふつとしている。

丈夫本と具す丈夫の魂 艱苦存するところ精気存す 三たび難関を透るは佛力に由る 五たび震旦に遊ぶまた天  
恩 雲霞すで見える一如の道 河嶽何ぞ無からん横絶の門 立ちて蒼穹を仰げば雄志動く 好し余骨を提げて  
乾坤に擲たん

因みに、土岐善磨博士は当時この詩を、

ますらをや ますらをごころ くるしみに いよよ振ひぬ みほとけの 三たびのすくひ もろこしも いつ  
たび踏みつ 雲かすみ 開くさとりに やま川も なにかさやらむ 空あふぎ 雄たけびすらく あめつち  
に いのちささぐと

と邦訳せられた。又巽軒井上哲次郎博士は、次韻を贈って、

老来猶ほ剩す<sup>あま</sup>壮時の魂 卓犖<sup>たくろく</sup>胸中英気存す 蚤<sup>はや</sup>く佛経を究めて補史を期し 徧く僧蹟を探つて報恩を欲ふ 垂  
楊春暖かにして淮水を洄り、落木秋高くして雁門に度る 欽ぶ君が名著年ごとに巻を加へ 永く鴻績を留めて乾  
坤に在り

と称揚せられた。その年十一月十六日、常盤博士還暦記念祝賀会が神田学士会館に開かれ、「常盤博士還暦記念佛教論叢」は昭和八年七月を以て刊行された。その頃までの著作目録、論文目録がその巻頭に収められており、巻末には病床を見舞った諸家の詩歌が付載されている。上記の詩文もそこから引いたものであるが、その中で、井上老博士が、「君が名著年ごとに巻を加へ」といわれたのは、それより前に常盤先生が東洋建築史の権威関野貞工学博士の協力を得て出版せられた「支那佛教史蹟」の図版并評解各五冊が名声海外にまで高く、昭和六年秋には更に第六集として支那佛教史蹟記念号が出版せられたのを指す。先生の学問的業績は広いが、中でも中国の佛教史において実地に当って古賢の遺跡を探り身を以て文献の記述を確かめ、文献だけではどうしても読みとれぬものを人と自然との中から身近

かに感じとられたことであった。このことは内外古今の中国佛教史家いかにその数多きに上るとも、先生の右に出る者がない。それについて紹介するに前だって、先ず先生の生い立ちを見ておこう。

## 二

先生は宮城県の伊具郡大張村にある順忍寺という寺に、住職常盤大宣の二男として生まれられた。それは明治三年で、奇しくも世尊の降誕と日を同じくする四月八日のことであった。十五歳にして父の生家である仙台新寺小路の道仁寺に入り、伯父常盤了然の養子となられた。これによって後に先生は道仁寺第十三代の住職とならたのである。十七歳の時、また小学校も卒業していないのに東京へ出て、当時東本願寺が浅草小島町に設立していた大谷教校に入学し、そこでは漢籍が主たる教科であったから傍ら神田の共立学校へ通って英語を学ばれた。そして明治二十二年には第一高等中学へ入り、予科三年、本科二年の課程を了えられた。先生が後に語られたところによると、同期生には本多光太郎、稲田龍吉、下村海南等の諸氏があり、その頃の学生は誰でも将来はどの部門にせよ断じて一流の専門家にならねば止まぬという気位を持っていたそうである。明治二十八年に東京帝国大学に進み、三十二年に文科大学の哲学科を卒業せられた。大学では井上哲次郎博士、元良勇次郎博士等をはじめとして錚々たる大家が多かったが、先生が常に述懐しておられたのは村上専精博士のことであった。一高時代から村上先生の徳風会に参加して意気と信念において最も深い感化を受け、先生が大学一年の時に村上先生は「佛教史林」という雑誌を創刊しておられるから、先生が後年中国佛教の歴史的研究に没頭されるようになったのもその影響によること明かである。先生は生前折にふれていつも村上先生の思い出を語っておられた。村上先生の自叙伝「六十一年」の中に見える不屈の精神と学問に対する執着ともいえるような粘り強さが、常盤先生の生涯を貫いているということを、わたくしはしみじみと感じないでおられない。小石川指ヶ谷町のお宅の書斎には「大器晚成」の四文字を大書した不住村上老先生の額がかかっていた。それ

は、「あわてるな、へこたれるな、じっくりと粘ってゆけ」と語っている。先生はいつも言っておられた。支那という国は、黄河の流れに象徴される。民族を見ても自然を見ても、大きくてとらえどころがない。流れているのやら流れていないのやらさっぱりわからぬ。それでいながら、知らぬまに目に見えぬ大きな力で動いてゆく。黄河の流れの幾変遷がそれを語っている。気の短いものではとてもこれは判るものではないと。中国の佛敎史研究に生命を賭けた先生の気魄は、村上先生によってしっかりとその種子を植えつけられたものと言ってよいであろう。

先生は大学二年の頃近角常觀氏らと共に、白川党による東本願寺渥美内局弾劾事件に感激し、京都へかけつけられたこともあったそうだ。しかし先生は結局、東京に在って学究の道ひとすじに進まれた。明治三十四年に清沢満之先生を学長として東京の巢鴨に真宗大学が開かれ、爾來十年間真宗大学は東京にあったが、明治四十四年京都に移って今の大谷大学となった。先生は明治四十年から四十四年まで真宗大学の教授となり、明治四十一年には東京帝国大学へ印度哲学科の講師として出講せられるようになった。その前後に他の宗門大学・私立大学等に講師となられたことが多かったが、東京大学では講師としての地位が長くて万年講師かと危ぶまれた。しかし大正十年、「大乘經典の研究」によって文学博士の学位を得られてから、十五年には教授に進んで印度哲学科第二講座を担当せられることになり、昭和六年三月の退職まで五年間支那佛敎を講ぜられたのである。筆者は大正十五年に印度哲学科へ入学し昭和六年に大学院を卒えた。当時印度哲学科の主任教授は第一講座の印度哲学及び佛敎学担当の木村泰賢先生であり、日本佛敎には講師で令名高い島地大等先生があった。木村先生は昭和五年に、島地先生は昭和二年に、共に早世せられたのと、わたくし自身が中国佛敎を専攻することになったのと、それらの関係でわたくしは長い間常盤先生から親しく薫陶を受けることになった。不肖の弟子であることを恥じつつ、先生への追憶を加えながらその後の御事蹟を述べて併せて遺業を紹介したいと思う。

東京大学を退職せられた後、先生は東洋大学に教授となられたが、東方文化学院東京研究所が外務省所管の文化事

業として開設せられるに当り、その第一回の研究員として門下の結城令聞氏を送り、先生御自身も評議員であると同時に研究員として入られた。当時は所長の服部宇之吉博士を初め、島田鈞一・小柳司氣太・古城貞吉・鳥居龍藏・原田淑人・佐伯好郎等の諸大家がおのの専門の部門で研究員として研究を担当しておられたから、関連部門の諸学者との交友は愈々深められたことと思う。先生はその後十五年まで研究員であられたが、昭和十四年四月からしばらくは御自身の属しておられる真宗大谷派の關係で尽力されることになった。すなわち浅草本願寺の輪番と東京の宗務出張所長とを兼ねられたのであって、その地位は十七年六月まで続いた。大正十二年の関東大震災に遭って焼失した堂宇の復興が成ったのはその在任中のことである。しかしこの方の仕事は、学者である先生にとって必ずしも思うようにゆかなかったようである。支那事変から発展した戦争は、日本人に対して中国文化に対する再認識を促した。佛教徒として同じく提携して平和を築きたいという願から佛教同学会が結成せられ、その後北京に東亜文化協議会が出来て、先生はいずれも重要な任を以て活躍された。昭和十八年には成尋顯彰奉讃会に出席のため開封へ行かれた。昭和十七年には日本佛学院という研究員十四名を擁する若い佛教学徒の研究組織を作り、十九年には安藤正純氏等の援助を受けて興亜佛敎文化研究所を開き自らその所長に当られた。先生はこうして多くの會議に参加し又研究団体を統率されたが、それだけでなく御自身も七十歳余の老齡を以て孜々として研究をつづけられたのであって、昭和十九年七月より八月に亙る三週間の真宗大谷派における夏安居本講は恐らく先生最後の研究努力であったと言つてよい。戦争中でしばしば防空壕に待避を余義なくされながらも、親鸞の作である諸経和讃に対し自らの見識により東西両本願寺古来学匠の業績を参照しつつ深い蘊蓄を傾けて講ぜられた。その準備のために、一人住まいの東京生活の中で盛夏も絶えず筆を執っておられた姿をわたくしは忘れることができない。これは確かに精魂を傾けての努力であった。安居が終ると急に元氣をうしない、戦局日に非を加える昭和二十年二月夫人の待たれる仙台の自坊へ帰り、そこで五月五日七十六歳を以て永眠せられたのである。

学者としての先生の業績は、何と言っても中国佛教史の研究にあるが、この方面の基礎をなしたものととして五回に亙る史蹟踏査を挙げねばならぬ。

第一回 大正九年九月より十年一月まで

房山、雲岡、正定、天龍山、龍山、龍門、漢陽、玉泉山、廬山、南京、宝華山、杭州

第二回 大正十年九月より十一年二月まで

濟南、泰山、開封、洛陽、龍門、嵩山、婦徳、宝山、南岳、瀋山、南京、揚州、茅山

第三回 大正十一年九月より同年十二月まで

天台山、普陀山、寧波、響堂山、洛陽、鞏県、廬山、四祖山、揚州、杭州

第四回 大正十三年十月より同年十一月まで

山東省各地

第五回 昭和三年十二月より四年一月まで

広州、韶州、雲門山、潮州、厦門、福州、黄檗山

この五回の旅行は大きく別けて発見、探求、紹介の各分野で大きな意味を持つものであったが、中でも日本人としての発見として特筆すべき成果の数例を挙げるならば、第一回の旅行で廬山の東林寺に東晋慧遠の墓塔を発見し、山西省交城县石壁山玄中寺に北魏曇鸞の遺蹟をつきとめ、また第二回の旅行で河南宝山大留窟・大住窟という隋の道憑・靈裕が遺した護法の遺蹟を見出し、失明してまで苦辛十年の後、日本へ戒律を伝えた唐僧鑑真的遺址大明寺を楊州の平山堂に確め、さらに第三回の旅行では河南省の北響堂山と直隸省の南響堂山とで一代蔵経を名山に壁刻した北

齊時代の志願を知った如き、どの一をとってもうずもれていた古賢の偉業を中国佛教史上再び白日の下に知らせたものであった。今日、日本の各宗は各々自宗の祖師の遺蹟のみを大陸に渡って巡拝したいと思いがちであるが、純粹なる為法不為身の念に支えられつゞこまでも古賢の跡を徹底的に踏査しその沿革と現状を究めずんば止まぬという熱意に燃えられた先生の功業は、国境を越え宗派を越えて人を感奮させずにはおかないものがある。とかく政治的・軍事的な交渉に偏よって胸襟を開いて心の融けあいを求めることの少なかった戦争中でも、先生だけは彼の国の文化人から絶対の信頼が持たれた。それはまことに理由のあることを思わしめられるのである。第一回の踏査記は「古賢の跡へ」として、第二回の踏査記は「支那佛教史蹟」として、それぞれその都度公刊せられた。第三回以後の分は、昭和十三年七月に前二書に修正を加えたものと合して、「支那佛教史蹟踏査記」として出版せられた。踏査旅行の概要や記録は以上の三著によって知られるが、遺蹟の沿革について精密な研究と現状の忠実な紹介とは初めに挙げた六冊の「支那佛教史蹟」並に「同評解」を俟たねばならぬ。評解には、それを要約した英文の *Buddhist Monuments in China* 五冊があることを付け加えておく。

それではどうして以上のような畢生の大踏査が企てられたかというに、その点に関しては「古賢の跡へ」の緒言にも記されているとおり、一方では長年の問支那佛教史を講じている者として、是非とも親しく千古の高僧碩徳の遺蹟を踏むことにより彼等の活き活きした霊を自分の胸に懐いおこす機会を得たいということと、又他方では中国の古代文化が急速に破壊されつつある情勢の中で同文同種の日本人により出来るだけこれを理解し研究し整理しておきたい、しかもその古代文化は佛教によって経緯せられているから、願わくば佛教徒の手によってこれをなしたいということとであった。この念願を実行に移すためには内外あらゆる方面の困難が予想されたけれども、そこには一旦志した以上断乎遂行しないではおかぬという不屈の精神があった。その間、財的には田代重右衛門氏の援助申出があり、後には啓明会などの援助があった。研究的には関野貞博士の提擧を受け、また東京大学や宗門関係者等の同情支援があっ

たことも終に決行に踏みきらせた因縁であろう。中国の奥地深く踏み入ろうというのに、「請々」ということ以外中国語を一つも知らず写真機すら出発ののち途中で手に入れその操作法を朝鮮で知人から教えられたという。まことに無鉄砲というか向う見ずというか、ただ矢も楯もたまらずまっしぐらに中国へ突進したという形であった。

しかし先生のこの大旅行がもたらした成果は大きかった。これより先日本における佛教史研究は、村上專精博士の唱導のもと中国佛教における境野黄洋・日本佛教における鷲尾順敬等の諸氏により始められた。しかし歴史的研究といっても、おおむね文献資料のみによるものであったり、主として高僧伝という内部資料のみにたよっていたというのが実情であった。日本国内はまだしも、中国佛教については、組織的にまた学究的に实地跡査に基く佛教史というものが全然なかったのである。現実はその地へ行って地勢を見、人情風俗に接し、遺蹟遺物の上からその教義信仰のおこる必然性と多様な現われ方とを見出すことが、佛教を生きた歴史の上に理解する必須条件である。先生の業績はこれの巨大な一步を踏み出されたものとして正に劃期的なものであったと言わねばならぬ。その土地の巡警さえ道を知らぬ僻地に入ってまるで空山無人の境に曇鸞の遺跡石壁寺を見出した時の思い出を、先生は、むかし法顯三蔵が万死に一生を得て中天竺靈鷲山に詣した時にも似た感激であったと言っておられる。たしかにそうであったと思う。あたかもその日は月蝕の夜であった。その時の詩に曰く、

石壁山深くして一徑通ず　幽溪窮まる処これ玄中

鷗啼いて月蝕す空広の夜　鑽仰す鸞綽二祖の風

なお先生には「支那佛教の研究」の三書がある。第一冊は十六篇の論文を集めているもので、その巻頭の「支那佛教史大観」や最後の「支那佛教文化の種々相」などは広く研究者の先ず読むべきものであり、又第二冊は十二篇の論文を集めたもので、その中の最後の「佛教の福田思想」の一篇など注目すべき着想であった。尚、「統支那佛教の研究」十二篇中の三篇は大乗起信論の印度撰述説に関するものである。これは古来印度の馬鳴菩薩作として知られて

いる起信論について、それは馬鳴の作でなく又印度での作でもなく、支那で撰述されたものだという説が唱えられ、それが大正九年頃学界の大問題となったのである。前田慧雲・境野黄洋・望月信亨・羽溪了諦・村上專精・松本文三郎の諸碩学が入り乱れて大論戦を交えた。その中で望月博士は明確にこれを支那撰述と断定し村上博士はその所説に賛成せられた。これに対し前田・境野・羽溪・松本の四氏は印度撰述論であったが、望月・村上の両氏の鋭鋒に対し印度撰述説を終始主張しつづけたのは常盤先生であった。望月博士は初め南方の撰論師仮作説を唱えて後に隋代北方地論家偽造論に転じ、村上博士も初は北方地論家撰述説であったが、後には頼耶縁起説を徹底せしめた上の真如縁起詳説だという説にかわっておられる。常盤先生がこの両者と三つ巴になって論戦を展開されたので、相互の間には随分深刻な批評や思いきった発言も交されたようであった。しかしこの論争によって研究水準がどれだけ高められたことか、思想的に思索の深化と文献的に調査の周到が躍進を遂げたこと、まことに測り知れぬものがある。先生の敗けし魂がこれを機会に愈々きたえられたに相違ない。又学問の深さ広さがこの時いやおうなしに培われていったことも争えないことだと思ふのである。起信論選述の問題は今日もまだ最後のな定説を見ていない。われわれは望月信亨博士の著書「大乘起信論の研究」と対照しつづ、先賢の業績を継承し公正な定論を見出すべく愈々前進を期さなければ相済みぬことだと思ふ。

#### 四

多方面に互る業績の中から上述以外のものについて、ここに著述を中心として大きい問題だけをひろってみることにしよう。

一、佛教思想は中国において儒教及び道家・道教との密接な関係交渉の上に発展した。単に一宗派の宗学的見地や佛教徒の記録だけに頼る護教的態度を以てしては、生きた精神史の実態をつかむことはできぬ。そこで中国の史書や

地誌や文学作品等をも渉獵しなければならぬのはもちろんで、何よりも中国人の心を長く広く深く支配した儒教・道教を無視して思想としての佛教史を論ずることが出来ぬのは言うまでもない。古来、三論玄義や原人論などの一部の書が講ぜられたが、これをすすめて組織的に研究へ手をつけた人はなかった。先生が「東洋文庫論叢第十三」として出された「支那における佛教と儒教・道教」の大著は、この点に於て劃期的の業績であったことを認めねばならぬ。その後では津田左右吉博士、武内義雄博士を初めとし、現に塚本善隆氏・福井康順氏や鎌田茂雄氏等その後をつぐ学者が出ており、京都大学人文科学研究所でも総合的な観点からの研究業績が若い学者の協力によって公にされつつある。これらはひとしく先生の啓発に負うもの最も大きいことを認めねばならぬ。先生は儒教の服部宇之吉、道教の小柳司気太、歴史の市村讚次郎等の諸大家と交友しておられた。善き友を得ることが学問の道には最も大切であることを感じしめられるのである。

二、佛教が成佛の道を教えるものである以上、佛性についての究明は古今の諸学派諸宗派を問わず何人にとってもひとしく大問題である。佛性を大きく論題としてとりあぐるところの天台・三論・法相・華嚴の諸宗はいうに及ばず、用語こそ佛性というそのままの文字に由らぬにしても禅も浄土教も日蓮宗も実はみな佛性の問題を別な言葉によって論じているのである。しかるに佛性という術語を表面に出して専らその解明に終始している涅槃経さえも、近代の佛教者はそれに集中的努力を傾けることを怠ってきた。常盤先生が、国訳一切経の全般涅槃経四十巻を担当せられたのを機として、「佛性の研究」という著書を公にし、印度・中国に互るこの問題の全般展開をたどられたのは、実にそうした学界の空白に目覚められたものである。涅槃経についても、佛性についても、その後大局から見た労作の公にされたものを見ない。門下生の一人としてまことに慚愧に堪えぬところである。すべて佛教思想の発展を見ようとするには先ず以て經典自体に対する自己の味読が先決要件であるが、近來はとかくそれを欠いて考証のみが学問であるかの如く考えられる傾向があり、それが大成を阻む障害となっているのではなからうか。

三、次に先生に在っては経録の研究と古逸文献の搜集に対する情熱も並々ならぬものがあつた。大藏經の目録としては出三藏記集と歴代三宝記と開元釈教録とが特に重要なものであり、佛典研究の基礎として凡そどの部門を調べるに当つても先ずこの三者に當つてみぬ者はないといつてよい。前述の起信論撰述論議のときも、歴代三宝記の資料価値等が争論の場にとりあげられている。あるいはそうした事情も因縁をなしたのか、先生は東方文化学院に研究員をしておられた時、出三藏記集を中心として労力と時間を要すること多大な経録の整理に当られたのであつた。その成果が「後漢より宋齊に至る訳経総録」の大著となつたのである。当時先生は六十六・七歳の頃であつたと思う。助手としての中田源次郎氏がいたとはいえ、カードを繰りながら研究室でコツコツと倦むことを知らず調査をしておられた当時の様子が今もわたくしの脳裏に浮ぶ。先生は又古逸文献の探査に熱心であつた。粟田口青蓮院・坂本西教寺・叡山安楽律院・梶尾高山寺等へ訪れられた。書庫の中で久しく世間から忘れられていた逸書を見出しては、学界に注意を喚起された例が少なくない。青蓮院から宝林伝と称する禅宗史書の一部分第六卷を発見せられた如きはその例である。宝林伝は後に山西省長城県で発見せられた金版藏経中からも六卷が見出され、初期禅宗史に光明を与えることになつたが、初めてその一冊を見出されたときの喜びは書庫の塵にまみれながらの探査苦勞を吹きとばすものであつたに相違ない。これが「宝林伝の研究」という労作の論文となり、又玻璃版を添えた単行本ともなつた。研究は探査を促し、発見は考証を求め、この一例でも知られるように、学問の楽しさはこの老学者をして終生勞を覚えさせなかつたのである。

四、中国の旅では、宜昌で危うく大掠奪に逢おうとし、嵩山少林寺に泊つた時には饑饉のため一塊の塩も得られなかつた。瀋山では土匪にまちがえられたこともあつた。そして第二回の旅行の後さすがの先生も、「人間の力ではどうにもならぬものがあることが少しわかつてきた、安んじて任せるより仕方がないという中国人の人生観がおぼろげながらうなづけるようになった」と言つておられた。またわたくしが学生の時、教室で弘明集の演習の際、どう理解

してよいか先生も困惑されることがあった。そうした時「どうもよくなりました」と、先生自身が卒直につくづく悲鳴をあげられていたことを覚えている。そういう思い出が今のわたくしには限りなくなつたのである。先生には、早い頃の著作に「馬鳴菩薩論」や、「佛典の解説」があり、又「四訳対照の法句経」があった。それから編輯書として、「佛伝集成」や「佛教要典」というようなものがあり、また日本佛教についても「日本佛教の研究」という論文集が出ているほどであるが、焦点はどこまでも中国佛教であった。東京帝国大学に印度哲学の講義が開かれたのは加藤弘之学長の時以来のことであるが、帝大に佛教講座を開かせたいとの議が有志の間に起つたのは大正四年のことである。その時開設の意見書を執筆した先生は、それを持って村上先生に従い仙台の齋藤善右衛門氏を訪われた。そしてその意見を伝えて助力を得られた。次いで村上先生の努力により安田善次郎氏からの寄付があつて、大正六年愈々印度哲学科の講座開設となつたのである。講座の名が佛教学とならずインド哲学ということになつた事情は、先生の隨筆集「超と脱」の中に詳しい。先生は終始中国と日本との紐帯を通して、佛教を学び本願の念佛を信じ一如精神を鼓吹せられた。まことに学の人であり、信の人であり、また実行の人であつた。

## 五

わたくしは曾って古本屋の店頭から「星月夜」と題する一小冊子を見つけたことがある。横山大観が表紙の絵を書き、常盤榴邸が法然聖人と親鸞聖人とを鑽仰し、服部躬治が道元禪師を久保の吉が日蓮聖人を鑽仰して、それぞれ作つた四編の詩を収めたものである。編集発行者は近角常観となつており、明治三十二年四月八日の発行である。緒言によれば大日本佛教青年会第八回の积尊降誕会に当り、会員が咄嗟に筆を執つたものという。定価七銭で八十五頁の小冊子ながら、先生三十歳の頃の詩想をうかがわれる。同じ仙台の詩人土井晚翠とも交友のあつたことを偲びつつ、その巻頭にある法然聖人の詩の初めを少し抄出して結びとしよう。

真如の月は清けれど 五天のむかし雲深く 東漸あとはへだたりて み法の花の影くらし  
かしこけれどもすめるぎの 五濁の雨はしげけれど 浮世におほふ袖をなみ 片州今は露もりて 鐘もかこつか無  
常の世

崇徳の御代は荊菰の ひたにみだれて天が下 娑婆のさまをぞしめすなる ここに易行の栞して 五乘いづれもへ  
だてなく 彼岸に見ゆるみ園生の 解脱の花を手折るべき 道をば後に示します

常盤大定

仙台市新寺小路道仁寺第十三世

真宗大谷派講師

文学博士

号、榴邸

諡、普行院

昭和二十年五月五日自坊

道仁寺にて寂、享年七十六。夫人千代は山形県酒田市本慶寺本多蔵界の長女。三男二女あり。自坊の境内に墓碑あり、銘文は塩谷  
温博士の撰にかかり、慧日院大谷勝信連枝の篆額を題す。